

アムール下流域における土器出現期の研究(2)

—オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡における 2012 年, 2013 年調査の概要—

橋詰 潤^{1*}・I. Y. シェフコムード²

内田和典³・M. V. ガルシコフ²

要 旨

オシボフカ文化はアムール川下流域に分布する, 世界の中でも最古級の土器を有する土器出現期の文化である。さらに本文化の意義はそれだけに留まらず, 日本列島の更新世終末期の資料との比較資料として重要なだけでなく, 更新世/完新世移行期における, 環境変動と人類行動との相関関係を考察するために重要な研究対象でもある。そのため, 筆者らはオシボフカ文化期の遺跡における人類行動の考察を最終的な到達目標とした調査を開始した。本論では, こうした問題について検討を行うための基礎データ収集を目的に実施している発掘調査について, オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡の 2012 年と 2013 年の成果の概要について報告を行う。

明治大学黒耀石研究センターと N. I. グロデェコバ名称ハバロフスク州立郷土誌博物館は, 2010 年より日露共同調査隊を結成し, 本地域での新たな発掘調査を開始した。オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡はロシア極東地域のウスリー川とアムール川の合流地点近傍の段丘上に位置している。発掘調査の結果, 6 層の堆積層が確認され, オシボフカ文化期の遺物はほとんどが IV 層に含まれていることが明らかとなった。遺物は, 少量の土器や炭化物と, 272 点の石器が出土した。石器の内訳は石鏃, 両面加工, 周辺加工の尖頭器, 多様な形態の搔器や削器, 両面加工の母型から削片を剥ぎ打面を作出する細石刃核を含む細石刃関連石器, 片面加工のツール類と剥片のほか, 磨石, 石錘, 敲石などの礫石器も出土した。出土した土器片の遺存状態は良好ではなかったが, 外面に櫛歯文, 内面に条痕を有するものなどが確認された。今回の研究成果によって, 今まで限定的であったオシボフカ文化期における遺跡の形成過程と石器石材の消費過程に関する情報について検討するのに必要な基礎的なデータを得ることができた。しかし, 今回報告した年次での発掘面積は限定的なものでもあり, こうした研究課題について, 今後の更なる調査の実施によって検討を続けていく必要がある。

キーワード: 更新世/完新世移行期, アムール下流, オシボフカ文化, オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡

1. はじめに

アムール川の下流域における土器出現期であるオシボフカ (осиповская)¹⁾ 文化は, 更新世終末にまでさかのぼる最古級の年代測定例を有する土器, 両面加工の尖頭器や局部磨製を含む石斧を有するなど, いくつかの類似点を有していることから, これまで特に日本列島の縄

文章創期の比較対象として注目されてきた (鈴木 1990; 梶原 1998; 栗島 1999 など)。そして, これまでに日露共同調査を含めた多くの調査が行われ (加藤・赤井 2003, 長沼ほか 2003, 2005 など), 本文化の内容についての理解が深まってきているといえる (長沼 2003, 2004, 2010 など)。さらに, それだけに留まらず本文化は, 更新世終末から完新世の初頭にかけて長期にわたって継続していたことが, 遺跡出土炭化物などの年代測定値を校正し

1 明治大学黒耀石研究センター

〒386-0601 長野県小県郡長和町大門 3670-8

2 N. I. グロデェコバ名称ハバロフスク州立郷土誌博物館
86 Tyrgenev st., Khabarovsk, 680000, Russia

3 北海道教育庁

〒060-8544 札幌市中央区北 3 条西 7 丁目

* 責任著者: 橋詰 潤 (j_hashi@meiji.ac.jp)

た上で検討することによって明らかになっている（小畑2003）。そして、グリーンランドの氷床コアの分析などから、この時期は急激かつ大規模な温暖化と寒の戻りが繰り返された環境の激動期であることも明らかにされている（Stuiver et al. 1995 など）。そのため、本文化の研究は、更新世／完新世移行期の環境変動への人類の適応行動を理解し、さらにそうした人類の適応行動の多様性と共通性について地域間比較を行う上で、非常に重要な地域事例であると位置づけることができる。

しかし、寒冷地である当地域では土壌の発達スピードが遅いため土層堆積が薄く、周水河性の擾乱も頻発することによって遺物の混在が生じ、一定の時間幅に収まる遺物のセット関係把握が困難になっている場合も多い。加えて、河川の合流点付近の舌状の平坦地などといった居住適地には、高頻度かつ長期にわたって占地が繰り返される場合も多く、より後代の人類活動によっても当該期の活動痕跡が乱されていることも多い。さらに、遺物の取り上げや記録の方法などといった日露両国間の研究手法や、それらを生み出してきた研究背景の相違といった問題も存在する。そのため、人類の行動を読み解くために必要なデータを蓄積する作業は、その途上であるというのが現状である。

こうした中、筆者らは2010年度より明治大学黒耀石研究センターと N. I. グロデェコバ名称ハバロフスク州立郷土誌博物館の間で締結された研究協定の下で、新たな日露共同調査を開始した（橋詰ほか2011; 橋詰ほか2013; 橋詰ほか2014）。本論では、橋詰ほか（2011）で報告を行った、2010年に実施したオシノヴァヤレーチカ（Осиновая Речка）12遺跡の調査に続き、2012年および2013年に実施したロシア連邦ハバロフスク州のオシノヴァヤレーチカ10遺跡の発掘調査と出土資料の分析の成果の概要を報告し、上記の研究課題に対する筆者らの取り組みの成果の一端について述べることにする。

2. 遺跡周辺の様相、古環境

ここでは、オシノヴァヤレーチカ10遺跡を取り巻く周辺の地形、古環境について概要を述べる。

2-1 周辺の地形と遺跡分布

現時点でオシポフカ文化は、アムール川下流低地帯を中心に、南は黒龍江省饒河市小南山遺跡（黒龍江省博物館1972）、北はハルピチャン（Харпичан）4遺跡までの南北約500kmの範囲に分布が確認されている。特にハバロフスク市周辺では、オシポフカ文化期遺跡が集中して分布する地域が3地域認識されている。1地域目は、ハバロフスク市から北東約40kmの、ガーシャ（Гаша）遺跡のあるマルイシェヴォ村からシカチ・アリヤン村周辺。2地域目は標識遺跡であるオシポフカ（Осиповка）1遺跡のあるハバロフスク市内のヴォロネジュスコエ岬付近。3地域目は、ハバロフスク市から南西約15～20kmにあるコルサコフ村からノヴォトロイツコエ村付近であり、オシノヴァヤレーチカ10遺跡は本地域に属する。これらの3地域はヘハツィル山脈から発した扇状地に位置しており、ヘハツィル・ゲオアルヘオロギー地区が設定されている（橋詰ほか2011など）。

オシノヴァヤレーチカ10遺跡は、ウスリー川とアムール川の分流との合流地点付近の、ロシア連邦ハバロフスク州オシノヴァヤレーチカ村に所在する（図1, GPSデータ：N48° 20' 10.6" E134° 54' 06.7"）。周辺には、ヘハツィル山脈から発した扇状地の末端が、アムール川分流の浸食作用を受けて形成された、川面からの比高が15～45mの崖線が広がる。その崖線上の平坦地に東西約10kmに渡り、60箇所近くのオシポフカ文化の遺跡が見つかっており、遺跡の所在地の地名をもとに西から、ビチハ（Бычиха）遺跡群、ノヴォトロイツコエ（Новотроицкое）遺跡群、オシノヴァヤレーチカ遺跡群に区分されている（図1）。ノヴォトロイツコエ遺跡群には、近年報告書が刊行されたゴンチャルカ（Гончарка）1遺跡（Шевкомуд и Яншина 2012）があり、オシノヴァヤレーチカ10遺跡は、最も東に位置するオシノヴァヤレーチカ遺跡群に含まれる。オシノヴァヤレーチカ遺跡群では、オシポフカ文化から中世にかける約20遺跡が確認されている。

2-2 古環境

ここでは、本遺跡周辺の古環境について、ゴンチャ

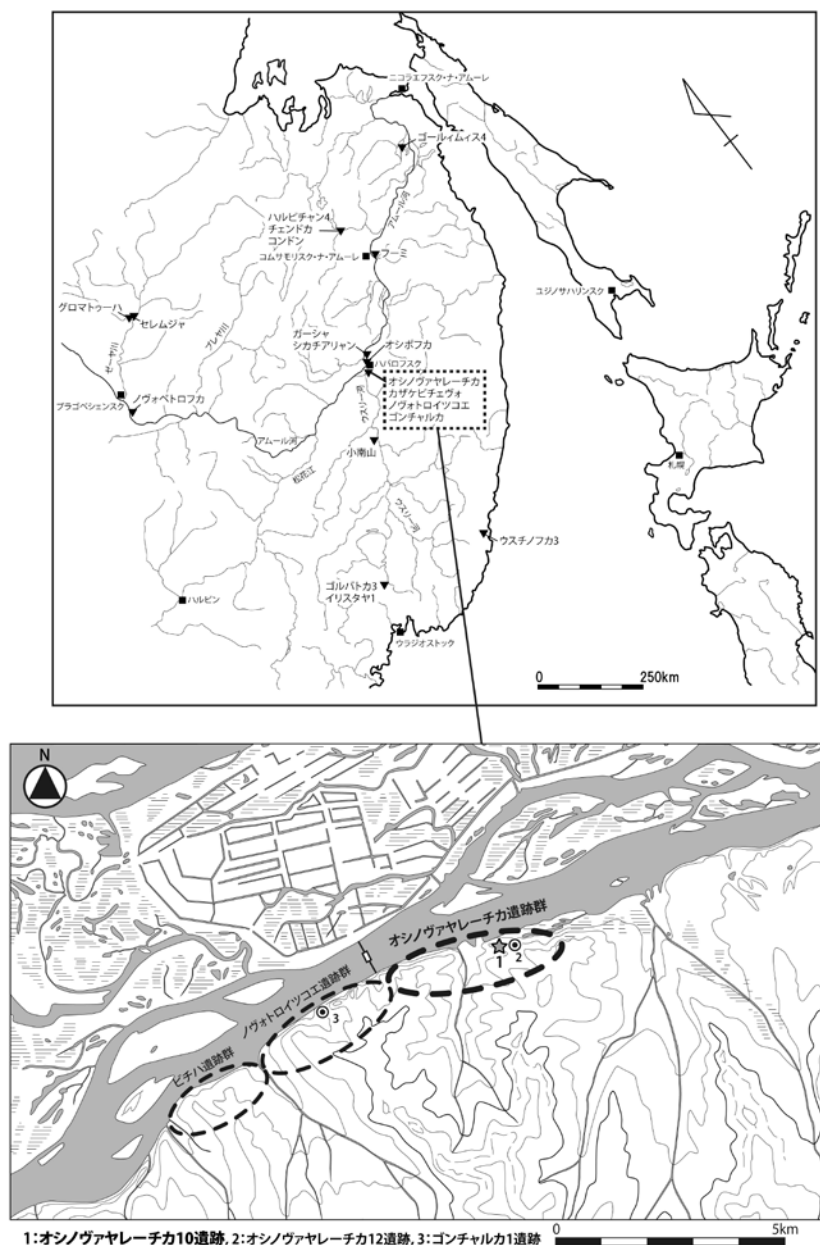


図1 オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡の位置と周辺の地形

ルカ 1 遺跡での 1995 年・1996 年の調査成果をもとに報告された、シェフカムード・内田 (2014) および Шевкомуд и Яншина (2012) に基づいて概略を述べる。

ゴンチャルカ 1 遺跡は、オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡の西方 (アムール分流の上流側) 約 4km, アムール分流の右岸部にあり、ゴンチャルカ川右岸の突端部に位置し、ノヴォトロイツコエ遺跡群に所属する (図 1)。ゴンチャルカ 1 遺跡では、 ^{14}C 年代測定、花粉分析、古地形の分析などが試みられている (Шевкомуд и Яншина, 2012)。シェフカムード・内田 (2014) および Шевкомуд и Яншина (2012) ではそれぞれの概略につい

て以下のように述べられている。

^{14}C 年代: 3 6 層, 4 層, 5 層の層中包含の炭化物や、土器付着炭化物から ^{14}C 年代測定が試みられている。その結果、3 6 / 4 層・5 層の間に時間的な差異を見出すことができ、前者の土器破片集中を伴う炉址などから 10,650 ~ 9660 ^{14}C yr BP, 炉状コンプレックス No.2 出土土器付着炭化物から 11,450 ~ 11050 ^{14}C yr BP の年代値が、後者では 12,560 ~ 11,240 ^{14}C yr BP の年代値が得られている。なお、5 層は氷楔 (アイスウェッジ) であり、4 層以上の堆積以前に形成されている。4 層以上は氷楔の影響を受けていない。

古植生：調査区 III の JK'-10 グリッド付近の壁面から、地表から 10cm ごとに 1m の深さまで、花粉分析用サンプルを 10 点採集している。花粉分析の結果、オシポフカ文化期の古植生は、古いほうから 1～6 期に区分された。1 期と 2 期は氷楔を充填する 5 層に対比され森林～ステップの景観を呈し、1 期はカバノキ属など、2 期にはカバノキ属の他に、ヤナギ属も広がる。3 期は氷楔を充填する土層の上に堆積する 3B 層に相当し、カバノキ属などの落葉広葉樹林が分布していたと想定されている。4～6 期は 3 6 層に相当し、4 期 (3 6 層下層) は針葉樹とカバノキ属などの落葉広葉樹の混交林、5 期 (3 6 層下層) はカバノキ属やヤマナラシ属などの落葉広葉樹、6 (3 6 層上層) 期はマツ属などの針葉樹や落葉広葉樹が形成されていたと想定されている。1 期と 2 期がもっとも寒く 12,500～12,000 ¹⁴C yr BP のオールダードリアス期からアレレード期への移行期、3 期は 12,000～11,350 ¹⁴C yr BP のアレレード期、4 期と 5 期は明確な寒冷化の時期、特にそれは 5 期に顕著で 11,100～9995 ¹⁴C yr BP のヤンガードリアス期に、6 層は顕著な温暖化が認められる 10,000～8000 ¹⁴C yr BP の完新世初頭に対比されている。

古地形：Махинов (2006) は、約 30,000～25,000 年前から 15,000～12,000 年前頃の更新世末には、アムール川とウスリー川の水位が現在よりも 10m 以上高く、アムール川下流域沿岸の低地帯の大半が冠水し、その結果、ヘハツィル山脈を中心とした高標高の帯は拡大したアムール川、ウスリー川によって形成された広大な湖によって四方を囲まれた島、あるいは半島であった可能性を指摘している。そして、Шевкомуд и Яншина (2012) では、Махинов (2006) で示された古地形に、オシポフカ文化期の遺跡分布を重ね、当該期の遺跡はこうした仮説を概ね支持するように、現在のアムール川、ウスリー川の水面より 15m 以上の高台に立地していることを確認している。

3. 調査の経緯

ここでは、本論で報告を行う 2012 年より始まった本遺跡での新たな共同調査へと至る先行研究、先行調査に

ついて確認を行い、そうした成果に基づいて策定した 2012 年以降の調査の目的について述べる。

3-1 先行研究、調査

まず、アムール川下流域の土器出現期であるオシポフカ文化の研究動向とその位置づけについて、橋詰ほか (2011) に補足を加えながら概略を確認する。

オシポフカ文化研究は、1926～1927 年に M. M. ゲラシモフ (Герасимов) が、木葉形尖頭器やスクレイパー、ナイフなどを含む石器群をハバロフスク市近郊の遺跡で発見したことを嚆矢とする (Деревянко 1983)。その後、A. П. オクラドニコフ (Окладников) が、1935 年にアムール川下流域において総合学術調査を実施する中で、ハバロフスク市内のアムール川に架かる鉄橋付近 (鉄橋遺跡) の調査や、1960 年代にはオシポフカ遺跡などの考古学調査を実施し、ゲラシモフが発見した資料を層位的に確認した (Окладников 1980)。オクラドニコフと A. П. デレビャンコ (Деревянко) は、アムール川下流域や極東周辺地域の研究調査の成果を加え、オシポフカ文化に土器や磨製石器が伴わないことを根拠に「中石器時代」に位置づけた (Окладников и Деревянко 1973)。

しかし、1975・76 年、1980 年、1986～1990 年のガーシャ遺跡 (オクラドニコフ・メドヴェージェフ 1990; Деревянко и Медведев 1992, 1993, 1994; メドヴェージェフ 1994) の発掘調査で、オシポフカ文化の石器に土器が伴うことが確認されたことにより、当文化の位置づけが「初期新石器時代」へ変更されることとなった。さらに、本遺跡から採集された炭化物試料によって、調査区 I 下層の粘土層中から 12,960 ± 120 ¹⁴C yr BP (JE-1781)、調査区 IV の地山直上の砂質粘土層中から 10,875 ± 90 ¹⁴C yr BP (AA-13393) と 11,340 ± 60 ¹⁴C yr BP (GEO-1413) の年代測定値が得られた。加えて、フーミ (Хумми) 遺跡の発掘調査でも、オシポフカ文化の石器に土器が伴うことが改めて確認され、¹⁴C 年代値も下層で 13,260 ± 100 ¹⁴C yr BP (AA-13392)、上層で 10,375 ± 110 ¹⁴C yr BP (AA-13391) という、ガーシャ遺跡での例を追認する年代測定値が得られた (Лапшина 1999)。こうして、オシポフカ文化の年代的な位置づけが定まっていた (デレビャンコ・メドヴェージェフ

1995 など).

ガーシャ遺跡とフーミ遺跡での研究成果により、①オシポフカ文化に¹⁴C年代測定値が与えられ、本文化が更新世/完新世の移行期に位置すること、②当文化の石器群には土器が伴うこと、③石器群の中に研磨技術(局部磨製石斧など)が存在すること、などが確認されたことにより中石器時代から初期新石器時代へと位置づけが変更された(Медведев 1995 など).

そして、上記の成果が日本でも紹介されたことにより(オクラードニコフ・メドヴェージェフ 1990; メドヴェージェフ 1994; デレビャンコ・メドヴェージェフ 1995 など)、更新世終末にまでさかのぼる年代測定例が伴う最古級の土器や、両面加工の尖頭器や局部磨製を含む石斧を有するなど、いくつかの類似点を有していることから、オシポフカ文化は日本列島の縄文草創期の比較対象として注目されることとなった(鈴木 1990; 梶原 1998; 栗島 1999 など). こうした、動向の延長線上に、その後開始された日露共同調査を含めた多くの調査や、発表されてきた論考を位置づけることができる(加藤・赤井 2003, 長沼ほか 2003, 2004, 2005, 2010 など).

3-2 オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡における先行調査

本論では主に 2012 年、2013 年の調査の成果について扱うが、本遺跡ではこれまでに 2001 年、2002 年、2005 年にも発掘調査が行われている。ここでは先行する発掘調査の概要について確認を行う。

本遺跡では 2001 年に И. Я. Шевкомуд (Шевкомуд) 博士を中心とする N. I. Гродекоバ名称ハバロフスク州立郷土誌博物館と中華人民共和国黒龍江省博物館との共同で初めての発掘調査が行われ、多量のオシポフカ文化期の遺物が得られた。特に両面加工の母型より削片を剥がして打面を作出する細石刃石器群が出土するなどの成果があった(Шевкомуд 2003)。そして、翌 2002 年には 2001 年調査区の北東に隣接する調査区を、北海道大学の加藤博文助教授(肩書きは当時のもの)を中心とする日本人研究者と、シェフカムード博士を中心とする N. I. Гродекоバ名称ハバロフスク州立郷土誌博物館が共同で調査を行った(加藤・赤井 2003)。本年

次の調査では、2001 年の調査で出土した両面加工の母型から削片を剥がし打面を準備する細石刃核(ただし、2002 年調査で出土したのは母型と想定される資料のみ)と、三角形の平面形を持つものを含む石鏃が共に出土するなどの新たな発見があった。両調査によって、当遺跡はオシポフカ文化期以外の時期の遺物を含まないこと、出土遺物には、三角形の平面形を含む石鏃、尖頭器、両面調整石器、細石刃、細石刃核、スクレイパー、ドリル、石斧、土器片が含まれることが明らかになった。石鏃は小形で薄く両面調整が施され形はよく整っており、尖頭器は木葉形・半月形・柳葉形のものがあり、大きさにややばらつきがある。細石刃は概ね幅がそろった小形のものが多く、多様な石材が用いられる。細石刃核はメノウや碧玉の小円礫を素材とし、小口面から細石刃を剥離するものの他に、両面調整のブランクを準備して細石刃核とする技術の存在が想定されている。スクレイパーの形態には多様性がある。石斧は両面加工により断面が凸レンズ状の形態を持つ打製石斧が出土している。土器は、いずれの調査でも遺存状態が悪い小破片が出土したのみで、文様等の把握は困難であった。また、2001 年の調査では黒曜石の小剥片が出土している。

上記の調査結果を受け、加藤・赤井(2003)では、今後の解明すべき課題として、1) 石器群と伴土器の実態の把握、2) 土器群の型式学的な検討、3) 文化層の形成過程の地質考古学的な検討、4) 古環境復元、5) オシポフカ文化の多様性の解明と細分の検討、が挙げられた。

さらに、2005 年には、北海道大学の長沼正樹博士を中心とする日本人研究者と、シェフカムード博士を中心とする N. I. Гродекоバ名称ハバロフスク州立郷土誌博物館による共同調査が行われ、2001 年調査区の深掘りによる堆積環境の確認がされ、2001 年・2002 年調査区の南側に 20m 弱離れた箇所に新たな調査区を設定し(図 3 参照)、そこでもオシポフカ文化期遺物が検出された。2005 年の調査により、本遺跡の形成過程にかかわる情報、そしてオシポフカ文化期の人類の痕跡がより広範囲に分布することが確認された。

3-3 課題と 2012 年以降の調査の目的

ここでは前節で確認した、先行する発掘調査の成果を

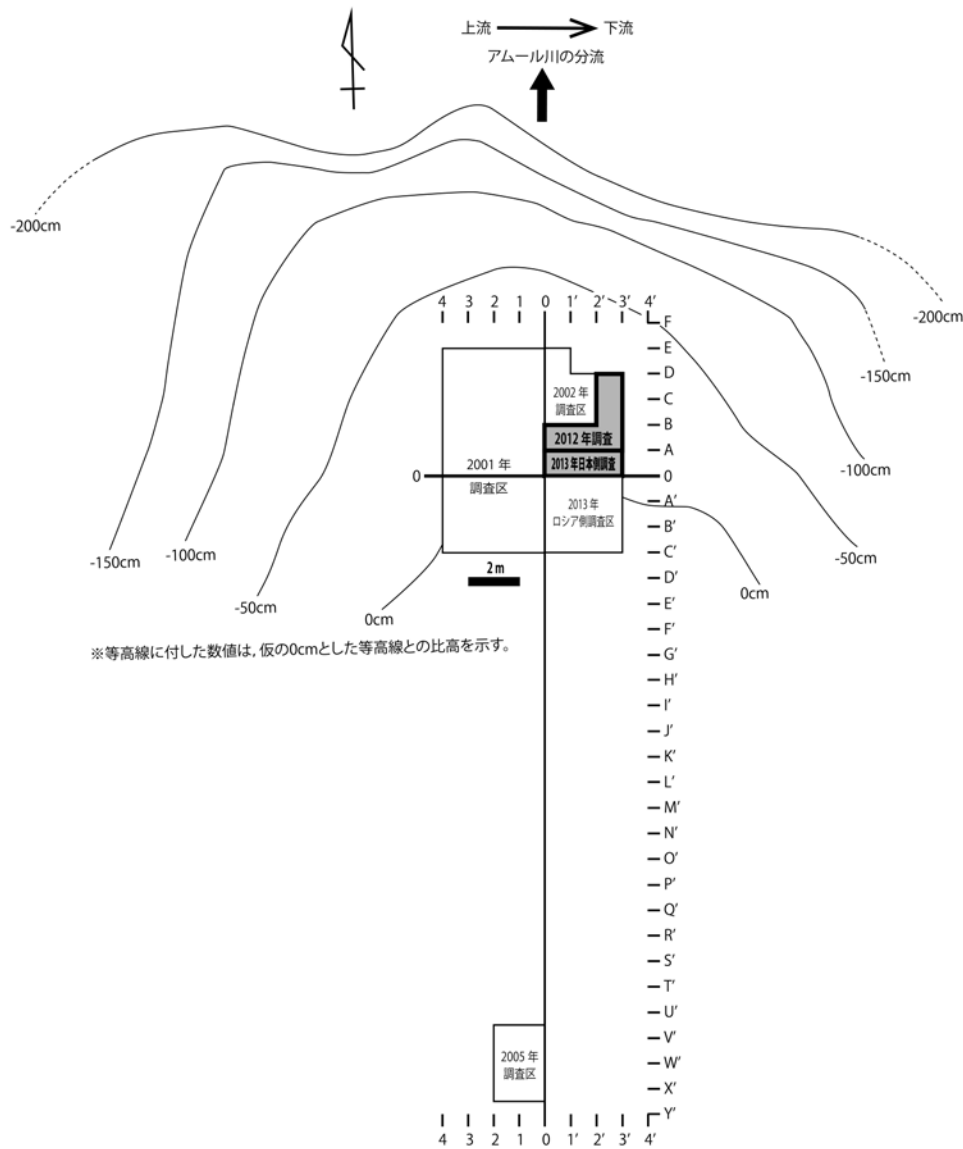


図2 オシノヴァヤレーチカ10遺跡の周辺地形とグリッド配置

踏まえた上で設定した、2012年以降の発掘調査の目的について述べる。

2012年からの調査では以下の解明すべき課題を設定した。①両面加工の母型を準備し、そこから削片を剥がすことによって打面を作出する、湧別技法類似の技術を有する細石刃石器群と石鏃との時間的関係の検証、②土器の検討、炭化物の年代測定による遺跡の時期決定、③出土石器の石材利用の復元、④石器の器種組成と石器製作の復元、の4点である。

①・②の検証により、本遺跡の時間的位置付けに加え、当地域の湧別技法に類似した技術を有する細石刃石器群と石鏃の、時間的位置づけについて解明することを目的

に設定した。つまり、こうした細石刃石器群と石鏃は共伴するのか。共伴するのであれば、あるいは共伴しないにしても、どのような時間的位置づけを与えることができるのかを解明することを目指すこととした。③は、本遺跡では他の遺跡ではほとんど使用されない緑色の堆積岩や、黒曜石の利用が認められる。そのため、周辺の遺跡とは異なる石材利用について出土資料をもとに復元することを目指して設定した。④は、オシポフカ文化期の遺物以外を含む可能性が他の遺跡に比べて低い、良好な条件を有する本遺跡出土資料に基づき、当該期の石器器種組成の特徴の検証と石器製作の復元を目指し設定した。

4. オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡 2012 年、2013 年調査の概要

4-1 調査区の設定と調査方法

オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡は東西を小谷に挟まれ、小谷を刻んだ流水の浸食作用によって生じた平坦地に立地しており、こうした遺跡の立地環境は周辺のオシポフカ文化期の遺跡に広く共通するものである。この平坦地は、遺跡の北側を流れるアムール川の分流に向かって舌状に張り出しており、アムール分流との比高は 20m 程である。2012 年の発掘調査では、2002 年の調査区を東と南側に取り囲むように拡張し、2013 年の発掘調査では、2012 年調査区を南側に拡張した (図 2)。

2012 年の調査では日露の参加メンバーが共同で、両者の調査方法を組み合わせながら同一の調査区の調査を行った。さらに 2013 年の調査では、新たな試みとして、可能な限り遺物の出土位置の 3 次元情報の記録を行い、後の検証が可能な形で記録作成を目指す日本側と、人工層位単位で剥片などの tool 以外の遺物を一括して取り上げ、効率的にある程度の広さの調査を進めることを目指すロシア側とで調査区を分け、発掘を実施した。それぞれの調査区では、日露それぞれのチームの調査方法を可能な限り適用して調査を行いつつも、調査の進行に合わせてそれぞれの調査区に人員を融通しあい協力しながら作業を進めていった。そして、日本側は 2012 年調査区の南に 3m² (西側から A-1', A-2', A-3' の 3 グリッド。図 3 参照)、ロシア側はその南に 9m² の調査区を設定し、計 12m² を調査対象とした (図 2)。以下では、日本側の調査区を中心に報告を行う。

4-2 調査区の堆積状況

本年次の調査では、調査区内で 6 層の基本層序を確認した (図 3)。I 層は表土だが、この層は 2002 年の調査時に広範囲にわたって掘削されており、本調査区では残存していない。II 層は暗褐色の砂質シルト、III 層はオリーブ褐色のシルトである。IV 層は黄褐色のシルトで、色調がやや暗い IVa 層と、それに比べやや明るくレンズ状に堆積する IVb 層に細分した。V 層は黄灰白色の

ロームで明褐色の小礫を含み、褐鉄鉱によるシミを斑状に少量含む。VI 層は明黄褐色のロームで褐鉄鉱の粒を含み、硬くしまりがある。2012 年および 2013 年の日本側の調査範囲内では、氷楔 (アイスウェッジ) などのような、周水河性の擾乱が発生したことを示すような痕跡は確認されなかった。ゴンチャルカ 1 遺跡やノヴォトロイツコエ 10 遺跡など、ノヴォトロイツコエ遺跡群でしばしば認められるような周水河性の擾乱の痕跡は (長沼ほか 2003, 2005)、今回の調査範囲内では認められなかった。こうした点で、本遺跡は周辺の他の遺跡、特にノヴォトロイツコエ遺跡群に比べ堆積環境に関して良好な条件を有しているといえる。

4-3 遺物の出土状況

遺物は III 層からわずかに (6 点) 出土している以外は、全て IV 層から出土している。特に V 層との層境に近い IVa 層下部からの出土が最も多い。遺物の平面分布は明瞭な集中を視覚的に識別することはできないが、調査区西側の A-1' 区からの出土が最も多い。遺物の垂直分布は、他の当該期遺跡に比べると非常にばらつきが少ない (図 3 参照)。特に、礫はほとんどが遺物の垂直分布の下底付近 (V 層との層境付近) に集中している (図 3 の遺物垂直分布と調査区東壁セクション図を参照)。遺物の垂直分布の状況から、IV 層の下底付近が本来の遺物の包含位置であったと推測可能である。

4-4 出土遺物

2012 年の調査および 2013 年の日本側の調査区では、概ね 2cm 未満の剥片、碎片と、石器かどうかの判断が困難な粗悪な石質の礫以外は、全て出土位置の記録に努めた。その結果、2012 年は 182 点、2013 年は 102 点、計 284 点の遺物の出土位置情報を記録し取り上げた (表 1)。なお、2012 年の調査では礫の平面分布を (図 3 の平面図参照)、2013 年の調査では礫の平面分布と垂直分布を記録し (図 3 の平面図と垂直分布図を参照) ているが、以下ではこれらについては除外して、礫以外の出土遺物の詳細について述べる。

4-4-1 出土遺物の組成

今回の調査では、石鏃、尖頭器、両面加工石器、細石

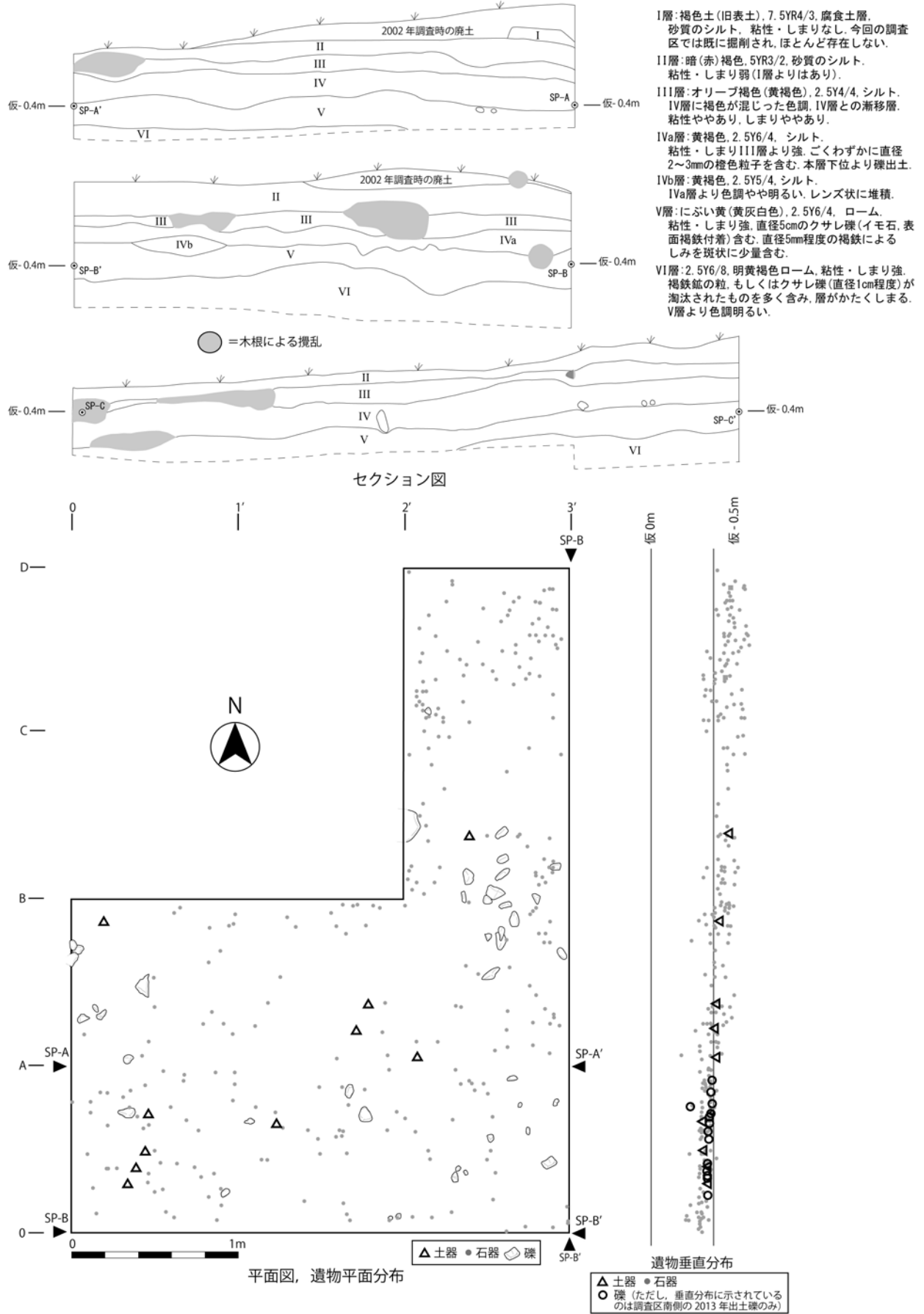


図3 セクション図と遺物分布

表1 出土遺物組成表 (2012年調査および2013年日本側調査区出土資料の合計)

石 鏃	尖 頭 器	両 面 加 工 石 器	細 石 刃 核	細 石 刃 核 ブ ラ ン ク	細 石 刃	削 片	搔 器	削 器	楔 形 石 器	二 次 加 工 の あ る 剥 片	微 細 剥 離 痕 の あ る 剥 片	剥 片	石 核	磨 石	石 錘	敲 石	原 石	土 器 片	炭 化 物	計
1	6	3	5	2	23	8	3	10	2	7	1	165	29	1	1	4	1	11	1	284
0.4%	2.1%	1.1%	1.8%	0.7%	8.1%	2.8%	1.1%	0.4%	0.7%	2.5%	0.4%	58.1%	10.2%	0.4%	0.4%	1.4%	0.4%	3.9%	0.4%	

※ % は全出土石器 284 点中に占める割合を示す
 ※※剥片, 碎片のうち大きさが2cm以上のものを出土位置記録をして取り上げている
 ※※※敲石 4 点のうち 2 点は折れ面で接合する

刃核とその未成品, 細石刃, 削片, 搔器, 削器, 楔形石器, 二次加工のある剥片, 微細剥離痕のある剥片, 剥片, 石核, 磨石, 石錘, 敲石, 原石, 土器片, 炭化物が出土した(表1)。細石刃関連遺物には, 湧別技法類似の技術によるものもある。また, 2013年の調査で平面形がひし形の石鏃が出土した(図4の1)。土器片は小破片が計11点出土しているが, 総じて遺存状態が良くない。炭化物が1点採集された以外に, 2012年調査区と2013年の日本側調査区では有機質遺物の出土は認められなかった。今回の調査では, 明確にオシボフカ文化期以外の時期と判断可能な遺物は出土していない。他の時期の遺物の混入の可能性は低いと想定でき, この点でも本遺跡の条件は良好であるといえる。

4-4-2 出土遺物の概要

以下では, 2012年調査と, 2013年の日本側調査区出土資料を中心に出土遺物の事実記載を行う。

4-4-2-1 石器

今回の出土石器の内訳は表1の通りである。大まかに区分を行うと, まず両面加工の石器とその製作過程で生じた剥片を用いた石器, そして細石刃関連の石器を抽出可能である。上記の2者は緻密あるいは細粒な石質の石材を用いているが, この他に粗粒な石質の石材を用いた礫石器や石核などが出土している。

両面加工の石器には, 図4の1の平面形が菱形の石鏃や, 2の有茎尖頭器, 5から8の両面加工尖頭器, 図5の9の両面加工石器などがある。さらに, 図5の25と

26の搔器も両面加工が施されている。図4の1は押圧剥離によって並行した剥離を連続して施し, 菱形の平面形が作出されている。器体の中央から先端にかけての両側縁は鋸歯状に加工されており, 基部をわずかに折れによって失っている。2は各グリッドを5cm単位で掘り下げる人工層位(プラスト(Пласт)と呼称)毎に, 一括して取り上げられた2cm未満の剥片などの中から抽出された資料であり, 先端と基部を折れにより失っている。押圧剥離による二次加工が施されている。両面加工尖頭器には, 5のような大形のもの, 6や7のような先端がやや突出しており二次加工がやや粗く厚みを残すもの, 8のような平面形が左右非対称のものがある。5は緻密な緑色の堆積岩を用い, 正面²⁾左下部から中央にかけ他の剥離面に切られる平坦な剥離面が残されており, 大形の横長剥片が素材であったと推定される。8は正面, 裏面の周辺を中心に加工が施されており中央部分には, 素材剥片の剥離面を大きく残し, 縦長剥片を素材に用いていたと推定される。図5の9は上部がやや尖頭状で幅広の平面形で, かつ厚みもある形態である。下部に折れを有しており, 折れ面には再加工が施されている。尖頭器や石筥状の両面加工の搔器などの未成品が欠損したものに, 再加工が施されている可能性もある。25は小形の, 26は中形の両面加工の搔器と分類した。石筥状の平面形で, 26の下部には正面, 裏面共に磨面を有している。また, この磨面は剥離によって切られている。断面形に厚みがないことなどから石斧には分類しなかったが, 局部磨製石斧である可能性もある。図6の27から29の削器は背面が多方向からの打撃による剥離面によって構成

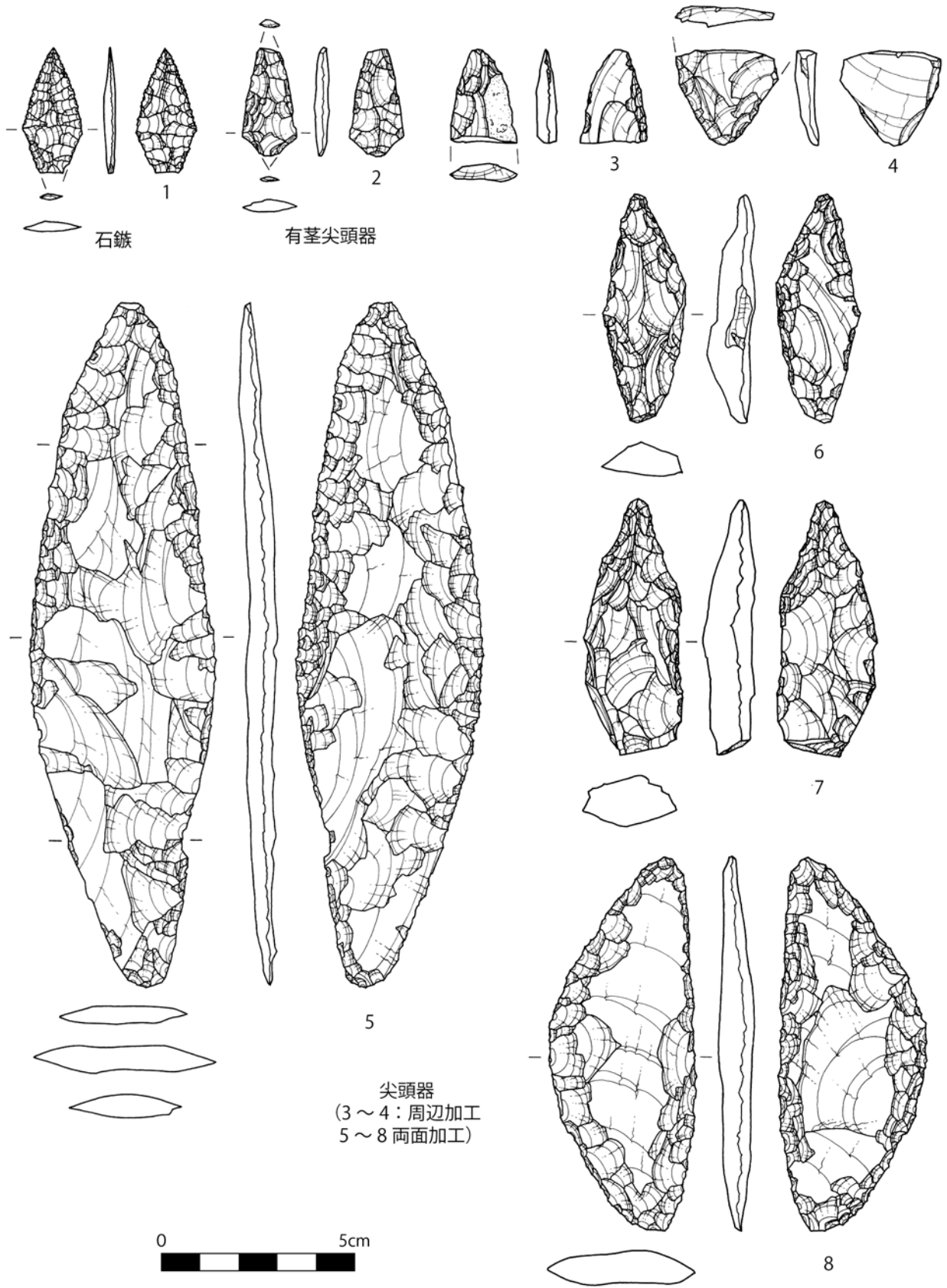


図4 出土石器 (1)

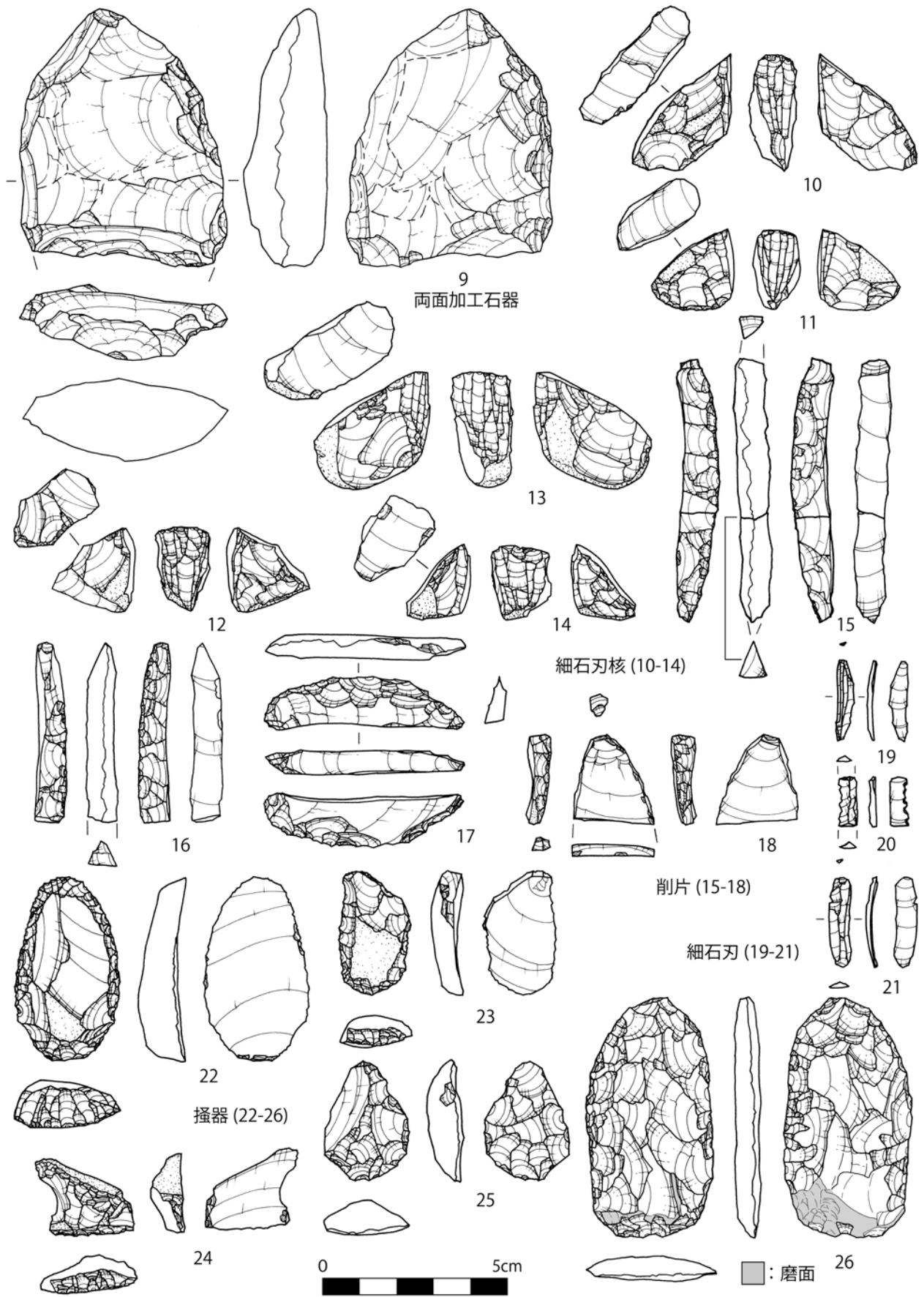


图5 出土石器 (2)

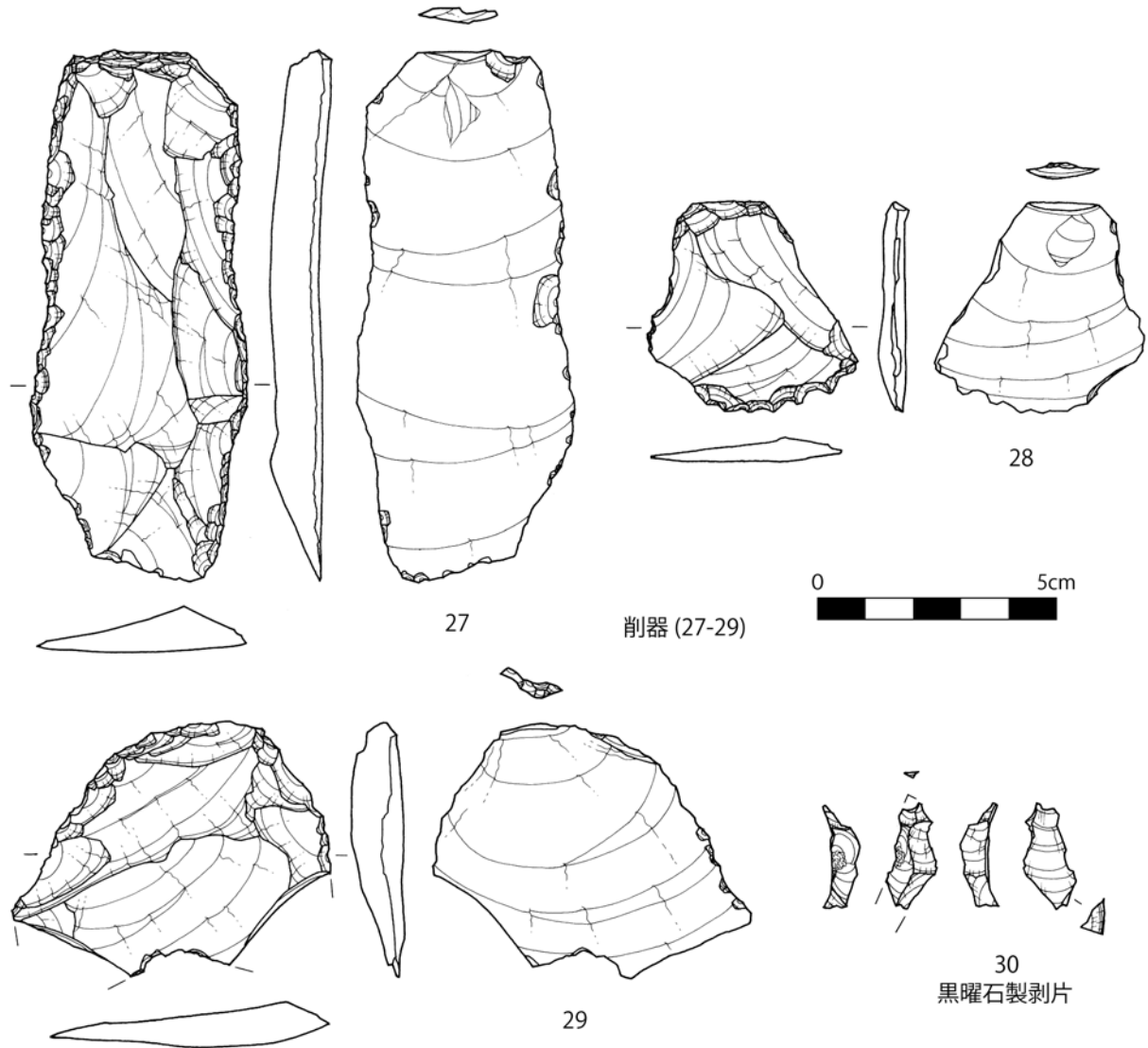


図6 出土石器 (3)

されていることなどから、両面加工の石器製作時に生じた剥片が素材に用いられている可能性が高い。図の6の28の刃部は鋸歯状に作出されている。図4の3や4は周辺加工尖頭器だが、6や7の両面加工尖頭器と同様の暗灰色の堆積岩を素材として用いており、これらも両面加工の石器製作時に生じた剥片が利用されている可能性がある。このように、打撃によって二次加工が施される両面加工の石器製作には、その他の剥片石器の素材供給も組み込まれていることが推定できる。

両面加工の石器に関連する石器には、図4の1が白色で珪質な石材（碧玉と思われる）が、図の4の2～4, 6, 7, 図の5の9は暗灰色で緻密な堆積岩が、図の4の5, 図の5の26, 図の6の27～29は緑色で緻密な堆積岩が、25は白色で緻密な堆積岩が用いられている。暗灰色の

石材は周辺のオシポフカ文化期遺跡では最も一般的な石材である。緑色の石材は周辺のオシポフカ文化期遺跡でも少量用いられているが、本遺跡では他の遺跡に比べ使用頻度が著しく高く、本遺跡の石材利用の特徴といえる。

細石刃関連資料には、図の5の15から17のような両面加工の母型から削片を剥ぎ、打面を作出するものと、10から14のような遺跡の近傍で採集可能な、円磨度の高い珪質な石材の礫を素材として用いたものに大まかに区分することができる。後者の資料でも削片が剥がされることがあるが(18など)、前者に比べ簡略な打面の作出、下面調整、側面調整などを経て細石刃の剥離が行われる。両者には形態や調整の違いだけでなく、使用される石材にも違いが認められ、前者はより大形の原石が、後者には遺跡近傍で採集可能な小形の円礫（玉髓や碧玉）が選

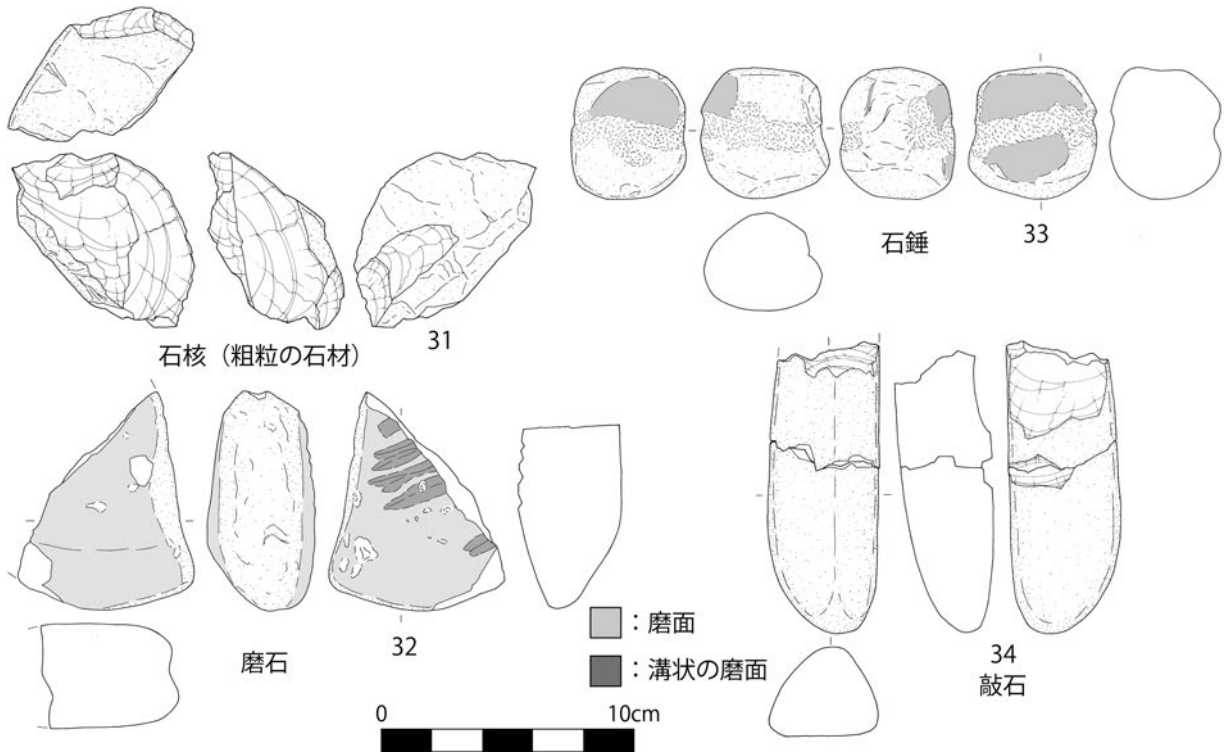


図7 出土石器 (4)

扱われている。2012年2013年の調査では、両面加工の母型から削片を剥ぎ打面を作出するものについては、削片のみの出土で、細石刃核は出土していない。15、16には珪質で白色の非常に良質な石材が用いられており、17には両面加工の石器に用いられている緑色で緻密な堆積岩が使われている。10から14の小形の円礫素材の細石刃核の細石刃剥離面を観察すると、幅の狭い比較的小形の細石刃が剥離されていたと推定される。19から21の細石刃については、両面加工の母型から作出されるものと、小形円礫から剥離されたもののいずれから生じたのかを即断することはできないが、細石刃核の使用石材から推定すると、珪質の石材を使用したものは小形の円礫を素材とした細石刃核から、白色の珪質石材および緑色の堆積岩製の細石刃は、両面加工の母型から最削片を剥ぎ打面を作出する細石刃核から剥離された可能性が高い。これらの中には20のように二次加工が施されたものもある。細石刃の中には玉髓、碧玉などの珪質の石材や、暗灰色の堆積岩、緑色の堆積岩が用いられているものが含まれる。また、剥片石器の中には、23や24の搔器のように円磨度の高い礫面を残す珪質の石材が用いら

れているものがあり、細石刃核の作出過程で生じた剥片が素材として用いられていることが推定できる。

図6の30は黒曜石製の剥片である。非常に黒味が強く不透明な黒曜石が用いられている。現在、産地推定のための分析を実施中である。少量ながら遠隔地石材が用いられていることを示す確実な例である。

この他に粗粒な石質の石材を用いた礫石器や石核などが出土している。図7の31は垂角礫を素材として用いた石核である。表1に示した石核のほとんどは同様の石材を用いたものであり、節理が多く打撃によって碎けてしまうような石質のため、剥離の過程などを読み取ることや、石器か否かを判断するのが困難な資料も多い。但し、剥離された剥片との接合が可能な資料もあり、本遺跡内でこうした石質の垂角礫を多量に剥離する作業が行われていたことは確実である。こうした石質の石材を用いた剥片の中に二次加工を有するものは存在しない。32の磨石は表裏に平坦な磨面を有するだけでなく、断面形がV字形の溝状の磨面を有している。有溝砥石とも呼称可能な形態である。溝状の箇所は断面形からは、研磨の対象物は先端の尖ったものなどを推定することがで

きる。図5の17の削片と平面分布的にも垂直分布的にも近接して出土している。図7の33は円礫素材の石錘である。一部に平坦な磨面を有するほか、溝状の加工が器体をほぼ1周するように施されている。溝の作出は敲打によって行われており、本資料の際立った特徴といえる。以前より、オシボフカ文化に漁労具が伴う可能性が指摘されてきたが（長沼2004, 2010）、共伴関係が確実でない資料も多く存在していた。本資料はより共伴の可能性の高い資料として提示可能であるといえる。34は敲石である、2点が折れ接合しており、棒状の円礫が素材となっている。本資料の敲打痕は明瞭ではないが、ロシア側の調査区より出土した資料の中に明瞭な敲打痕を有し、かつ本資料に似た形態のものが含まれているため敲石に分類した。

4-4-2-2 土器

2012年の調査では5点、2013年度の調査ではロシア側の調査区も含め、10点の土器が出土した（うち6点が日本側の調査区から出土）。今回の調査で得られた土器は、器面全面が摩滅または片面が剥落しているという特徴がある。埋没過程で生じた土器への自然作用の影響が強く反映されていると考えられる。ここでは、ロシア側調査区も含め、文様・調整ともによく観察することができた。3点の2013年調査時出土土器の観察結果について述べる。

図8の1は深鉢形土器の胴部と考えられる。焼成は不良であり、内外面ともにやや磨耗しているが、文様や調整を比較的良好に残している。外面には斜行状に2～3単位の櫛歯文を2段構成で水平状に施文する。内面には幅約1.5cmの条痕が明瞭に残されている。条痕は下側から上側の順に調整が施されている。胎土には1mm以下の石英や長石を少量含んでいる。外面は暗褐色、内面と断面は黒褐色となる。また、断面観察からは、内外面をそれぞれ貼り合わせて製作している可能性を指摘することができる。

図8の2は深鉢形土器の胴部と考えられる。同一個体と考えられる破片が他に2個体出土しており、その内の2個体が接合する。胎土には1mm以下の石英を含んでいる。外面には斜行状に2～3単位の櫛歯文を水平状に施文する。斜行櫛歯文の構成段数は、上側の一段目が不明瞭であるため不明確であるが、少なくとも3段程度で構成されるものと考えられる。内面は幅約1.1cmで6単位の条痕によって調整されている。条痕は下側から上側の順に調整が施されている。焼成は不良であり、内外面が暗褐色、断面が黒褐色となり、断面観察からは1と同様に内外面を貼り合わせた痕跡を確認することができる。

なお、1と2は（1×1mの）同じグリッドから出土し、出土層位の差も1プラス（人工層位で5cm程度の上下差）の違いであるため、近接して出土していると言え

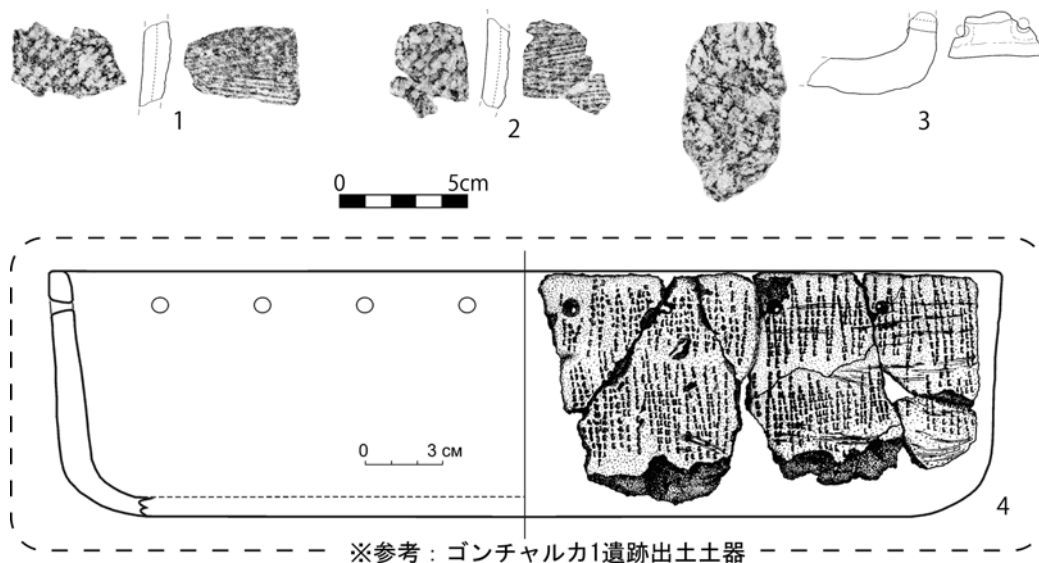


図8 出土土器（4は Шевкомуд и Яншина 2012 より）

る。1と2は文様や調整、胎土等から同一個体の可能性がある。

図8の3は鍋形土器の底部付近である。同形の土器はオシポフカ文化を代表するゴンチャルカ1遺跡で出土している(図8の4; Шевкомуд и Яншина 2012)。外面は、磨耗が激しいため櫛歯文等の文様は不明瞭であるが、器面には凹凸がよく残されている。側面部には二次焼成による黒斑がある。また、底部立ち上がり付近においては二ヶ所に穿孔を施している。内面は、底面をナデ、側面をヨコナデによって調整している。焼成は不良であり、外面は暗黄褐色、内面が黒褐色、断面が暗灰褐色となる。胎土は3mm以下のチャートや1mm以下の長石を含んでいる。

1～3以外の土器は、外面が磨耗しているものが多いため文様等については不明である。ただし、内面が残存するものが多く、磨耗が激しくないものでは、条痕調整を観察することができる。この内面条痕調整をもつ櫛歯文土器は、極東地域における初期新石器時代オシポフカ文化の条痕文土器から前期新石器時代マリンスコエ文化の櫛歯文土器への土器型式編年を考える上できわめて重要である。

4-4-2-3 その他の遺物

A1'グリッドのIV層(プラスト5)より炭化物が1点採集された。但し、単独での出土であり、炉と推定可能な構造物や、炭化物集中などに伴うような検出状況は示していない。その他に有機質の遺物は出土していない。

5. 成果と課題

ここでは、3-3で設定した調査の目的に対し、2012年、2013年の調査で得られた成果をまとめると共に、残された課題について整理を行う。

5-1 成果

まず、3-3で設定した、解明すべき課題について再確認しておく。①両面加工の母型を準備し、そこから削片を剥がすことによって打面を作出する、湧別技法類似的な技術を有す細石刃石器群と石鎌との時間的関係の検証、

②土器の検討、炭化物の年代測定による遺跡の時期決定、③出土石器の石材利用の復元、④石器の器種組成と石器製作の復元、の4点である。

今回設定した目的のうち、①については、新たに湧別技法類似的技術による細石刃資料(図5の15から17)と、石鎌(図4の1)が同層準(全てIV層)で出土した。今回の調査では多くの出土資料がIV層の下部から出土しており、出土資料の垂直分布は比較まとまっているといえる(図3の垂直分布図参照)。さらに、今回の調査範囲内では周氷河性の擾乱の痕跡が認められないこと、より新しい時期と明確に判断可能な遺物が含まれていないことなどから、他の遺跡の例に比して両者の共伴の可能性は高いと判断することができる。②については、日本側調査区では包含層中より単独出土した炭化物が1点得られたのみであるが、ロシア側調査区より炭化物集中が検出され、年代測定用試料が採取されており、測定を依頼中であるため、今後、日本側調査区とも対比可能な年代測定値が得られる可能性がある。さらに、これまでの調査で出土した土器は小破片のみで、遺存状態も良くなかったため、本遺跡出土の土器に関するデータはほとんど得られてこなかったが、4-4-2-2で提示したように、新たに土器に関するデータを得ることができた。③と④は、本年の調査でも緑色の堆積岩を用いた石器が多数出土しており、データの蓄積を進めることができた。現状では、接合作業などは未実施だが、出土位置の記録を行った上で取り上げた資料については、全点の基本的な属性を計測している。今後の分析の継続によって、調査目的の解明に迫ることが可能と考える。

さらに、今回の調査では、1点のみであるが黒曜石製石器が出土した(図6の30)。本資料の産地推定分析を進めることで、本遺跡における石器石材の移動にかかわる情報の獲得が期待される。そして、図7の33の石錘のような漁労具も発見された。これまでにも、オシポフカ文化期遺跡では漁労具と推定される石錘の発見はあったが(長沼2004, 2010)、今回の発見はより確実な共伴例と評価可能である。図7の32の磨石には断面がV字形の溝状の痕跡が残されており、骨角器の研磨など、先端が細いものが研磨の対象であったと推定される。2-2で紹介した、Махинов(2006)による更新世末にはア

ムール川とウスリー川が現在より高水位であったとの推定と、それに対してオシポフカ文化期の遺跡分布を重ねて検討した Шевкомуд и Яншина (2012) の結果が正しいとすれば、オシポフカ文化期の遺跡は現在よりはるかに水産資源とのかかわりが密な環境であった可能性がある。オシポフカ文化期における漁労については既に想定されてきているが、考古学的、地質学的なデータの蓄積によって当該期の生業について、より具体的に検討可能となる展望が開けてきているといえる。

5-2 課題

今回の成果について上記してきたが、一方で残された課題が存在する。まず、今回の調査の目的としてあげた、①については、今回の調査で発見された石鏃(図4の1)は平面形が菱形で、2002年の調査で見つかった三角形のものとは異なる。今回の調査では図4の2のような有茎尖頭器も出土しており、欠損のため基部形態は不明だが1についてもこうした平面形であった可能性は残されている。今後の調査での石鏃資料の蓄積と、その他の遺物との共伴関係の確認がさらに必要である。②については、2012年調査区と2013年日本側調査区では、遺存状態の良好な炭化物試料を採集することができなかった。現在年代測定を依頼している、ロシア側調査区で採集された炭化物試料の測定結果が期待される。③と④については、今後の接合作業の実施や、既に計測を終えている出土石器の計測データの分析を進め、本遺跡における石器製作にかかわる人類行動の復元を進める必要がある。

さらに、本遺跡では今回報告を行った2012年、2013年の調査以前に3回の調査が行われている。既調査のデータの再検討を進めることにより、当遺跡における人類行動の復元をより具体的に進めていく必要がある。さらに、本遺跡はこれまでの調査範囲を大きくこえて、広がりがあることは確実である。今後の調査の継続によって、上記の未解決の課題に取り組む必要がある。

6. おわりに

本年度の調査では、前回までの調査での所見を支持する成果が得られた。加えて、これまで本遺跡ではほとん

どデータが得られていなかった土器についても、外面に櫛歯文、内面に条痕を有していることなど多くの情報を得ることができた。ロシア側の調査区から得られた年代測定用試料と共に、本遺跡の年代的位置付けを探る上でも非常に重要な成果を得ることができたといえる。今後は、さらに本遺跡での調査を継続することによって、未解明の課題に取り組むとともに、これまでの出土資料の分析を進め、残された課題に取り組む予定である。

謝辞

本論にかかわる野外調査および資料整理では以下の諸先生、諸氏からご指導、ご協力をいただいた。また、査読者からの有益なコメントにより本論の内容は改善された。末筆ながら記して感謝いたします。

赤井文人氏, Ms. E. A. Bochkaryoba, Ms. S. F. Kositsyna, 加藤博文教授, 村上昇博士, 長沼正樹博士, 小野昭教授(アルファベット順, 敬称略)なお, 本研究は, JSPS 科研費若手研究 (B) 25770279 ならびに高梨学術奨励基金の助成による研究成果の一部を含んでいる。

註

- 1) 本論中で初出のロシア語の人名、遺跡名、文化名については、日本語表記の後にロシア語を記した。日本語表記については、同一人名や遺跡名であっても訳者によって異なる場合があるが、本論ではロシア語表記をそれぞれに付すことで統一し、引用文献の提示では各原典での表記に即した。
- 2) 実測図の説明の際に用いる実測図各面の配置法と呼称は田中(2004)に従い、基本的に左右に3面を配している場合は左から正面、右側面、裏面を配置している。ただし、15、16、18、30と33は正面の左に左側面を配置している。17は上から、下面、裏面、上面、正面という配置を行っている。10から14の細石刃核と31の石核は正面の上に上面を配置している。

引用文献

- 梶原 洋 1998 「なぜ人類は土器を使いはじめたのか—東北アジアの土器の起源—」『科学』68 (4) : 296-304
- 加藤博文・赤井文人 2003 「オシノヴァヤ・レーチカ 10 遺跡における発掘調査報告」『第4回北アジア調査研究報告会要旨集』, pp.11-14, 東京, 北アジア調査研究報告会実行委員会
- Деревянко, А. П. 1983 *Палеолит Дальнего Востока и Кореи*. 216с. Новосибирск (Россия). Наука.
- Деревянко, А. П. и Медведев, В. Е. 1992 *Исследование поселения гася (общие сведения, предварительные результаты, 1975 г (общие сведения))*. 32с. Новосибирск (Россия). Институт Археологии и Этнографии Сибирское Отделение Российской Академия Наук.

- Деревянко, А. П. и Медведев, В. Е. 1993 *Исследование поселения гася (Предварительные Результаты, 1980 г.)*. 109с. Новосибирск (Россия). Институт Археологии и Этнографии Сибирское Отделение Российской Академия Наук.
- デレビヤンコ, А. П.・メドヴェージェフ V. E. 1995 「極東における最も古い土器センターの一つとしてのアムール河流域」『国際シンポジウム東アジア・極東の土器の起源—縄文文化の起源を探る—予稿集』梶原 洋編, pp.11-25, 仙台, 東北福祉大学
- 橋詰 潤・内田和典・Shevkomud, I. Y.・Gorshikov, M. V.・Kositsyna, S. F.・Bochkaryova, E. A.・小野 昭 2011 「アムール下流域における土器出現期の研究 (1) —オシノヴァヤレーチカ 12 遺跡の調査成果と課題—」『資源環境と人類』1: 27-45
- 橋詰 潤・Shevkomud, I.・内田和典・Gorshikov, M.・Kositsyna, S.・Bochkaryova, E. 2013 「アムール川下流域の初期新石器時代オシボフカ文化の研究—オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡の調査から—」『日本考古学協会第79 回総会 研究発表要旨』, pp86-87, 東京, 日本考古学協会
- 橋詰 潤・Shevkomud, I.・内田和典・Gorshikov, M. 2014 「オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡における 2013 年調査の成果と課題—アムール川下流域の初期新石器時代オシボフカ文化の研究—」『日本考古学協会第 80 回総会 研究発表要旨』, pp.184-185, 東京, 日本考古学協会
- 黒龍江省博物館 1972 「黒龍江省饒河市小南山遺址試掘簡報」『考古』1972-2: 32-34, 北京, 科学出版社
- 栗島義明 1999 「神子柴文化の系統問題—ニーナ論文に寄せて—」『土曜考古』23: 157-170, 土曜考古学研究会
- Махинов, А. Н. 2006 *Современное рельефообразование в условиях аллювиальной аккумуляции*. 232с. Владивосток (Россия). Дальнаука.
- メドヴェージェフ, V. E. 1994 「ガーシャ遺跡とロシアのアジア地区東部における土器出現の問題について」(梶原洋訳)『環日本海地域の土器出現期の様相』小野 昭・鈴木俊成編, pp.9-20, 東京, 雄山閣
- Медведев, В. Е. 1995 К проблеме начального и раннего неолита на Нижнем Амуре. *Обзорные результаты полевых и лабораторных исследований археологов, этнографов и антропологов Сибири и Дальнего Востока в 1993 г.* С.228-237. Новосибирск (Россия). Институт Археологии и Этнографии Сибирское Отделение Российской Академия Наук.
- 長沼正樹 2003 「更新世終末から完新世初頭における極東北部の両面調整石器群」『古代文化』55 (10): 25-33
- 長沼正樹 2004 「アムール下流の土器出現期」『東アジアにおける新石器文化と日本』I: 129-139, 東京, 國學院大學 21 世紀 COE プログラム
- 長沼正樹 2010 「アムール下流域のオシボフカ文化」菊池俊彦編『北東アジアの歴史と文化』, pp.55-69, 北海道, 北海道大学出版会
- 長沼正樹・シェフコムード, I. Ya.・工藤雄一郎・コスタナ, S. F.・松本 拓・ガルシコフ, M. V.・橋詰 潤 2003 「ゴンチャルカ 1 遺跡 2001 年発掘調査の概要とその諸問題」『旧石器考古学』64: 73-82
- 長沼正樹・Shevkomud, I. Ya.・Gorshkov, M. V.・Kositsyna, S. F.・村上 昇・松本 拓 2005 「ノヴォトロイツコエ 10 遺跡発掘調査概報」『北海道旧石器文化研究』10: 117-124
- 小畑弘己 2004 「シベリア・極東地域の初期土器研究について」『考古学ジャーナル』519: 15-20
- Окладников, А. П. 1980 О работах археологического отряда амурской комплексной экспедиции в низовьях амура летом 1935 г. *Источники по археологии Северной Азии (1935-1976 гг.)*. С.3-52. Новосибирск (Россия). Наука.
- Окладников, А. П. и Деревянко, А.П. 1973 *Далекое прошлое Приморья и Приамурья*. 440с. Владивосток (Россия). Дальневосточное Книжное Издательство.
- オクラードニコフ, А. П.・メドヴェージェフ, В. Е. 1990 「アムール河下流, ガーシャ多層位集落遺跡の研究」(清水陸夫・村上恭通訳)『古代文化』42 (4): 38-42
- Лапшина, З. С. 1999 *Древности озера Хумми*. 206с. Хабаровск (Россия). Приамурское географическое общество.
- Шевкомуд, И. Я. 2003 Осиновая Речка-10 —новый памятник переходного периода от палеолита к неолиту на Нижнем Амуре. *Археология и социокультурная антропология Дальнего Востока и сопредельных территорий*. Третья международная конференция «Россия и Китай на дальневосточных рубежах». С.63-70. Благовещенск (Россия). Издательство Благовещенского государственного педагогического университета.
- シェフカムード, I. Ya.・内田和典 2014 「オシボフカ文化期における居住と古環境」『環日本海北回廊の考古学的研究 (1) —ヤミフタ遺跡発掘調査報告書—』, pp.100-107, 北海道, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設
- Шевкомуд, И. Я. и Яншина, О. В. 2012 *Начало неолита в Приамурье: поселение Гончарка-1*. 270с. Санкт-Петербург (Россия). Музей антропологии и этнографии им. Петра Великого (Кунсткамера) Российской академия наук.
- Stuiver, M., Grootes, P. M., Braziunas, T. F. 1995 The GISP2 $\delta^{18}O$ Climate Record of the Past 16,500 Years and the Role of the Sun, Ocean, and Volcanoes. *Quaternary Research* 44-3: 341-354
- 鈴木忠司 1990 「解説」『古代文化』42 (4): 42-43
- 田中英司 2004 『石器実測法 情報を描く技術』, 87p., 東京, 雄山閣, 東京

(2014 年 12 月 31 日受付 / 2015 年 1 月 20 日受理)

Emergence period of pottery in the lower Amur River Basin, Russia (2): Preliminary Excavation Report of the Oshinovaya rechika 10 Site (2012-2013).

Jun Hashizume^{1*}, Igor Ya. Shevkomud²,
Kazunori Uchida³ and Maxim V. Gorshikov²

Abstract

The Oshipovka culture complex is responsible for some of the earliest pottery in the world. Moreover, the Oshipovka culture complex is an important case study of the relationship between environmental change and human behavior during the transition period from Pleistocene to Holocene. The goal of this study is to examine human behavior as determined from the Oshipovka culture complex. The purpose of this paper is to report on the results of our investigation so far in this area.

Since 2012, new excavations have been carried out at the Oshinovaya rechika 10 site by a joint Russian-Japanese research team. This site is located on the terrace near the confluence of the Ussuri and Amur Rivers in Far East Russia. The excavation revealed six layers; the lower part of layer 4 holds the most artifacts dating to the Oshipovka culture complex. Pottery fragments and more than 270 chipped stone tools have been excavated, including arrowheads, bifacial and unifacial points, microblades and microblade cores, spalls, scrapers of various types, unifacial tools, flakes and cores. We have also recovered several pebble tools including an abrader, a stone weight, and a hammerstone.

This new research expands our understanding of site formation processes and lithics reduction sequences of the Oshipovka culture, which we will continue to research in our future studies.

Key words: Pleistocene-Holocene transition, lower Amur River Basin, Oshipovka culture complex, Oshinovaya rechika 10 site

(Received 31 December 2014 / Accepted 20 January 2015)

1 Center for Obsidian and Lithic studies, Meiji University, 3670-8, Daimon, Nagawa-machi, Nagano 386-0601, Japan
2 Khabarovsk Regional Museum after NI Grodekov, 86 Turgenev st., Khabarovsk 680000, Russia
3 Office of Education, Hokkaido Government, Kita 3-jo Nishi 7-chome, Chuo-ku, Sapporo 060-8544, Japan
* Corresponding author: J. Hashizume (j_hashi@meiji.ac.jp)